

The Aspern Papers における James の現実受容

—— 語り手の理想とその崩壊を通して ——

後川 知美

序

The Aspern Papers は、1888年3月から5月にかけて *The Atlantic* に掲載された中篇である。Henry James の *The Notebooks* によれば、この作品の構想は、ある逸話に由来していることがわかる。19世紀後半、Shelley を崇拜するボストンの批評家 Capt. Silsbee は、姪とフィレンツェに暮らす Byron の元恋人 Miss Claremont が、Shelley と Byron の秘蔵の手紙を所有しているという情報を得る。Silsbee はその手紙を手に入れるため、Miss Claremont の邸の下宿人になりすます。やがて高齢の Miss Claremont は亡くなり、Silsbee は彼女の同居人であった姪に手紙を見せてほしいと頼む。身寄りのない独身の彼女は、自分との結婚を条件に、彼に手紙を渡すと言うが、Silsbee はその申し出と手紙の価値を天秤にかけ、逡巡する。そのうちに、詩人たちの手紙が燃やされてしまったことが判明する。

James はこの逸話をもとに、ヨーロッパで活躍したアメリカ詩人 Aspern と、ヴェニスに暮らす彼の元恋人 Juliana Bordereau を創作し、彼らの私生活を記事にしようとする批評家が物語を語る形式をとった。語り手は Aspern や Juliana を神聖視し、二人の過去の栄光に、自らの理想を投影するかのようである。しかし、最終的には語り手の抱く詩人への理想は、現実と対峙することで崩壊する。そこで、本論ではまずこうした語り手の理想の在処とその崩壊の意味とを、ヨーロッパに創作活動の拠点置いていた James が、アメリカ人の視点から、作品の舞台となる19世紀後半のヴェニスをどう見ていたのか、という視点を加えて考察しつつ探ってゆきたい。さらに、詩人の私生活を暴こうとする語り手の願望には、ジャーナリストとしての使命感と、プライバシーを侵害するジャーナリズムの俗悪な面とが混在していることに着目する。そして、現実と対峙する際の語り手の姿勢を考察するうえで、James がアメリカのジャーナリズムをどうとらえていたのか、そこに19世紀後半のアメリカの現実に対する彼のどのような見解が表されているのかを、彼の作家としての生き方を視野に入れて議論したい。

1. 語り手が理想とする過去、作品の舞台としてのヴェニス

James が、自身のイタリア旅行記やエッセイをまとめた *Italian Hours* (1909)

では、彼が「感傷的な旅行者、あるいは外部者」(Edel 19)としてイタリアを観察していた様子がうかがえる。幼少期よりヨーロッパで生活することの多かった James は、自分が根無し草であることを意識していた。そのため、どこの土地においても自分が外部者であるという意識が付きまとい、その土地を外部の目から観察する姿勢が身に付いていたといえる。そうした国籍離脱者としてヨーロッパに暮らす James にとって、ヴェニス は国際的な活動を行う芸術家や文人の集まる都市として共感をおぼえる場所であった。ヴェニス が、「抱きしめ、愛撫し、所有したい」という欲望を抱かせる場所であり、そこに滞在することは「永遠の情事」にも等しい、と James が表現したことに注目した Edel は、その表現が「非常にエロティック」(17)であると述べる。また *Italian Hours* はヴェニスの章で始まり、ヴェニスの章で終わっているが、このことから、James がこの地を特別視していたことがわかる。そして、ヴェニス に対する James の憧れや関心は、全編に渡りヴェニスを舞台とした *The Aspern Papers* において、語り手や Aspern, Juliana たちにさらに色濃く投影されているようである。

語り手にとって Aspern は、アメリカ文学史上後世の批評家たちの進む道を照らし出す輝かしい存在である。Aspern を礼賛する語り手は、Juliana が住むヴェニスの古い邸を、実際に Aspern がそこに滞在した事実がないにもかかわらず、詩人のこだまが残る貴重な歴史的建造物とみなす。というのも、こうした幻想であっても、語り手は、Aspern と関連のあるヴェニスに滞在し、そこで彼の活躍した過去に思いを馳せることで、現在に生きる自分と、過去に生きた詩人がつながっているといった連帯意識を抱いて満足しているからである。

語り手は、実際に Juliana と面会するにあたり、彼女が現代ではなく、過去に生きる女性であることを強く意識する。彼にとって Juliana と接することは、18世紀から19世紀初頭にかけて活躍した一世代前の女性たち、すなわち本文で言及されている Mrs. Siddons や Queen Caroline, Lady Hamilton といった女性たちと接することと同じである。語り手がヴェニスを訪れる19世紀後半に、彼女がまだ生存していたこと、それも人目につきやすいヴェニスで隠遁生活を送っていることは奇跡的である。語り手の目に映る彼女は、過去から復活した存在であり、「過去の遺物」(123)である。語り手が Aspern と Juliana に憧れを抱くのは、彼らが活躍していた過去はもはや失われたものであり、そのことが、語り手に郷愁の念を呼び起こすためである。

このように、Aspern と Juliana には、現在は失われてしまった過去への郷愁や理想が投影されており、それがヴェニスという舞台装置により強調されている。Aspern をアメリカの大詩人と設定し、元恋人のアメリカ人女性をヴェニスに配置することで、James は華やかな過去のヴェニスに生きた、アメリカ詩人と

その詩に詠われた理想の女性を再現しようとしたのである。そこには Aspern が活躍した過去に対する語り手のノスタルジーが表れており、また、James 自身の過去への郷愁も語られている。その際 James は、ヴェニスとアメリカの交流に関心を持ち、国籍離脱者として創作活動を行なった自分の作家的意味を見出そうとする。しかし語り手を通して過去への理想を語る一方、James は作家の視点から、語り手の理想が現実と矛盾していることを、繰り返し述べる。語り手のジャーナリストとしての使命感にはやや行き過ぎた面があり、彼の言動には、現実を見るよりも彼自身にとって都合のよい理想の中に生きる傾向がある。このように、語り手の抱く理想が現実のヴェニスとはやや乖離していることを指摘することで、James は語り手とは異なる作家の視点から、現実に対峙する自分の生き方を模索しようとしているように見える。

2. 変容するヴェニスと現実世界に生きる Juliana

ヴェニスは、イタリア王国に統合された1866年をきっかけに、その黄金時代の威力を失い始める。ヴェニスが実質的にも社会的にも衰退して行く姿は、その繁栄を当然のことだと考えていた19世紀の旅行者たちにとっては馴染みのない現象であった。James が最初にヴェニスを訪れたのは1869年で、最後の訪問は1908年であった。この間、James は変わり行くイタリアを観察し、その様子を先に触れた *Italian Hours* に綴っている。この中ではイタリアの約20の都市についての言及がなされているが、全体のうち4分の1がヴェニスの描写に割かれている。そして、“Venice”, “The Grand Canal” といったエッセイからは、まだ黄金時代の華やかな雰囲気が残っていたヴェニスの魅力が伝わってくる。と同時に、James は、ヴェニスガリソルジメントにより20世紀的な国家の一部へと変貌し、共和国時代の栄華を失っていく様子にも直面している。そうした新しいヴェニスの姿に対し、「古いものは新奇なものよりも優れている」(7) であるとか、ヴェニスの頹廢が「繁栄よりも輝かしい」(47) と述べているところに、ヴェニスの変化を受け入れがたいと感じていた James の心境が窺える。

ヴェニスの変容に直面した際の James の葛藤は、*The Aspern Papers* において、語り手が現実の Juliana と接したときに受ける失望に通じるものがある。彼女の邸の間借りを申し出る語り手に対し、「たくさんお金を払ってくれるのなら部屋をお貸ししましょう」(125) と返答する場面や、下宿代を請求するときに、「お金は金貨で持ってきてくれるのですか」(127) と、すぐに金に言及する場面には、彼女の金銭へのこだわりがあからさまとなっており、語り手が理想とする Juliana 像とは程遠い姿がある。そこでは、Juliana がかつて Aspern の詩の中で詠われた麗しき女性ではなく、金銭に執着する老婆であるという現実が、語り手

に突きつけられている。

また、Juliana の顔を覆っている緑のシェイドは、彼女の顔を見たいと願う語り手の願望を拒絶すると同時に、彼女の現実の姿を覆い隠す仮面でもある。緑という色にはさまざまな象徴的意味があるが、彼女の生存の奇跡を強調する、「不滅、復活」を表す色としてみるのが適切であろう。また緑は心理学的には、「自己中心的、冷酷」あるいは「金銭を社会的地位の尺度とする」といった意味もあり、語り手の理想とする Juliana とは異なる彼女の姿が暗示されている。語り手は、Juliana の表情が読み取れないことに失望するが、そのシェイドの裏には「骸骨のような顔」(123)があると想像し、恐怖心を抱くように、Juliana の現実の姿が非常におぞましいものである可能性を察知している。このように、Juliana の現実の姿は語り手の前に執拗にあらわれ、彼の理想像を崩壊させる。語り手が憧れを寄せるのはあくまでも Aspern の詩に登場する Juliana であって、実際の彼女ではないことが、語り手の幻滅によって明らかとなる。

4分の3世紀もヨーロッパに住み着いている Juliana には、もはや母国アメリカの特徴が失われている。語り手が理想とするのは、現実の彼女ではなく、過去における彼女と Aspern である。そのため、アメリカからヨーロッパに渡った Juliana が Aspern に愛されたとされる1820年は、語り手にとってとりわけロマンティックな年である。語り手は、Juliana が若かりし頃、彼女がまだアメリカ的性質を保ったままヨーロッパを訪れた19世紀前半の、ヨーロッパにおけるアメリカ人の生き方を理想としているのである。

それは、過去に思いをめぐらす語り手の想像の中にも語られる。Aspern は、アメリカにまだ文化と呼べるものがなかった時代の芸術的「先駆者」(136)であり、アメリカの文化的水準を高めるため、ヨーロッパに渡ったとされる。その行為は「ロマンティックで英雄的」(136)であり、語り手は、そのような Aspern に畏敬の念を抱く。また語り手の推測によると、Juliana の父親は、ヨーロッパで絵画を学ぶために祖国を捨てたとされる。芸術のために祖国を捨てるという潔い決断をする両者に、語り手は感心し、過去におけるアメリカの芸術家を理想的だとみなす。そして Aspern の手紙を入手できれば、過去と現在を結びつけ、語り手にとって理想的な世界を再現することができるかと信じている。しかし、その手紙に価値があるかどうかは明白ではなく、理想的な過去は語り手の「強迫観念と空想」(Tambling 91) が生み出したものにすぎない。

James は *The Aspern Papers* の「序文」において、Byron の時代のロマンティズムとアメリカを結び付けたものを書きたいと述べている。彼はヴェニスで訪れたモチェニーゴ宮殿に、かつて Byron が滞在し、執筆に励んでいたという事実

を芸術家の理想像の一つと見なし、Aspernにその姿を重ねようとしたのである。語り手がロマンティックな年だとみなす1820年は、Byronの絶世期でもある。彼はその4年後に亡くなり、同時にイギリスのロマン主義も産業界の急速な発展やJ. S. Millの功利主義の台頭を背景として衰退していく。

語り手が生きる19世紀後半のアメリカでも産業や工業は進化を続けている。当時、印刷技術が急激に進んだ出版界においては、紙の原料となるパルプが大量に入手できる状況となったこともあって、書籍の価格が大幅に下がるという現象が生まれた。マスメディアという概念が生まれ定着していくのが1880年代から19世紀末にかけてであり、語り手が生きる「新聞、電報、写真、インタビューの発達した19世紀後半」(115)といった現実には、語り手の理想と比較されて、一層際立つものとなっている。そしてJamesの目には、このような急速な変化を抱える19世紀後半のアメリカ社会が、進化や発展に伴い古いものが忘れ去られていく寂しい光景として映っていたことが推察できる。このことは、*The Aspern Papers*の語り手が理想とする19世紀前半のアメリカが、Jamesにとっての現実である1880年代のアメリカ人には、すでに実体のないものとなっていたことを示唆している。

3. ジャーナリズムの俗悪さに対する James の批判的態度

語り手は、友人のジャーナリストとともに、自分たちこそがAspernの魅力に世に伝えてきた第一人者であると自負している。しかしこれはあくまでも語り手自身が述べているに過ぎず、その信憑性は低い。Jamesはこのように自信過剰な語り手を描くことで、行き過ぎたジャーナリズムへの皮肉を表しているとも考えられる。なぜならAspernやJulianaに対する語り手の見方には、純粋にその芸術性を鑑賞しようとする視点よりも、スキャンダルを求め好奇心を満足させるジャーナリズムの俗悪な面がより強く感じられるからである。語り手がヴェニスを訪れたのは、「ロンドンの大衆紙」(114)を情報源として、Aspernの女性関係を調査するためである。どんな手段を用いても詩人の手紙を入手したいと願う語り手は、「偽善と二枚舌」(117)を活用して、Julianaの姪である世間知らずのTitaを口説くぐらいの覚悟でいる。語り手は、「Aspernの詩に注目する代わりに、彼の生活に対して病的なほどの興味を抱き、ヴィクトリア朝特有の偏見をもって、彼の詩の価値をはかる」(Ascari 93)のである。語り手の興味は、Aspernへの詩の文学的価値よりも、Julianaを筆頭に、数々の女性たちと関係を持った男性としての生き方の方に向かっている。その異様な注目の仕方は、語り手を「葬式の家に強引に入り込む新聞記者のような卑劣漢」(154)に貶め、ジャーナリストの俗悪な面をことさら強調することになる。

また語り手は、自分が Aspern のプライバシーを世に伝える大きな役割を担っていると思ひ込み、自分の仕事が生のためになると信じている。偽名と大金を使ってまでも Juliana の邸の下宿人になりすまし、詩人の過去の私生活を後世に伝えたいという語り手の使命感は結構なものであるかもしれない。しかし、過去を暴くといったプライバシー侵害行為に俗悪さを描き込むことで、利益優先主義とつながるようなジャーナリズムのやり方を、James は語り手を通して批判しているのである。

ジャーナリストという職業は、1880年代のアメリカにおいては、弁護士や医師、経済学者や技術者と提携して細分化された記事を書くことにより、その専門性を際立たせていく。女性の記者が登場するのもこの時期であり、James は *The Portrait of a Lady* (1881) において Henrietta Stackpole という女性記者を登場させている。当時、平均的な記者たちの収入はまだ低かったが、これから成長が見込まれる分野でもあった。南北戦争後から1880年代中頃までは、*Harpers, Century, Scribner's* といった既存のエリート雑誌が優勢であったが、1890年代までには雑誌自体の価格が下がっていき、大衆小説や雑多な記事、イラストを満載した一般雑誌が国民の読書生活に影響を与えるようになる。W. D. Howells の *A Modern Instance* (1882) には、利己的で虚言癖のあるジャーナリストが描かれているが、彼もそうした人物像により、James 同様、消費主義やマスメディアによる文化の標準化に抗議の声を上げ、ジャーナリストへの批判を表現しているように見える。

James は *The Aspern Papers* において、過去を再現したいという語り手の強い思いが、詩人の私生活を暴くことも厭わないという、ジャーナリズムのモラルを欠いた一面を露呈させていることを示した。そこに込められた抗議や批判の声には、私生活を暴かれる立場であった James が、ジャーナリストたちの目に触れる前に自身の手紙を燃やしてしまったことからわかるように、作家の私生活をそっとしておいてほしいという強い願望が垣間見える。これは言い換えれば、1880年代当時、近代化が進むアメリカ社会において、プライバシーのような人間として守られるべき尊厳が踏みじられることが、増加していたことを表しており、James がそれに対して強い危機感を抱いていたことを意味しているのだろう。

結び：James の現実と理想への対処法

1888年1月、James は Howells 宛の手紙で、自作 *The Bostonians* (1886)、*The Princess Casamassima* (1886) が、予測に反して評価されなかったことを嘆いている。そこにはそのような不評を下す当時の批評世界に、文学を鑑賞する

だけの知的レベルがないのだといった James の不満が込められていた。この時期の James は、作品の売れ行きが芳しくなく、読者からの反応が少ないことにも意気消沈していた。同時に、1880年代から1890年代頃までは、家族の死や劇作の失敗など、James にとって不幸な出来事が重なり、彼が悲観的になっていた時期でもある。そのような中、James は過去へ戻り過去を美化することで、現実逃避を試みたことがあったかもしれない。彼が現代化するヴェニスの変容を受け入れ難いのは、過去への憧れを捨てきれないからでもあるだろう。

The Aspern Papers の語り手が、詩人の真の姿と自分が思い描いた理想の間で葛藤する様子には、現実を直視できず、理想ばかり高いジャーナリストに対する James の批判が込められているのかも知れない。しかし、語り手は理想と現実がうまく折り合わないことに対して葛藤するものの、最終的には抗い難い現実を前にしてそれを受け入れる。また、語り手が入手できなかった Aspern の手紙には、理想的な詩人像を崩壊させるような醜い現実が綴られていた可能性もある。もしそうであるならば、手紙の入手によって、必ずしも語り手の望む理想的な過去が再現されるとは言えないであろう。

手紙が世に公開されることなく燃やされてしまうという結末には、読者が勝手に作り上げる理想的な作家像とは別に、読者の知らない現実の作家像が存在するのだ、というジェームズの忠告が込められているようでもある。そしてジェームズはその忠告を、ある作家の影武者を描くことで、私生活における現実の作家と、読者にとっての作家像が別物であることを扱った *Private Life* (1884) や、ある作品のテーマに関わる貴重な秘密を追及しようとして失敗する批評家を描く *The Figure in the Carpet* (1896) においても発している。そこには *The Aspern Papers* のテーマと同様、現実と折衷し、モラルを保持することに意義を見出す James の姿があり、それが彼にとって無視できない問題であったことがうかがえる。

Aspern の手紙との交換条件として提示された Tita との結婚を拒絶し、手紙の入手をあきらめるといふ語り手の行為には、過去への郷愁と現実をどのように折衷していくかという問いに対する、James ならではの対処法が見出される。そこには、手紙を入手するために「偽善と二枚舌」に依存した語り手であっても、結婚にまでそれを用いることはありえないという、James が要求する最低限のモラルが示されているのである。

Works Cited

- Ascali, Maurizio. "‘The Master in the Middle Distance’: Max Beerbohm, Henry James and Literary Forgery." *Henry James against The Aesthetic Movement*. Ed. David Garrett Izzo and Daniel T. O’Hara. Jefferson: McFarland, 2006. 87-96.
- Edel, Leon. "The Italian Journeys of Henry James." *The Sweetest Impression of Life: The James Family and Italy*. Ed. James W. Tuttleton and Agostino Lombardo. New York: New York UP, 1990. 8-21.
- James, Henry. "The Aspern Papers." *Tales of Henry James*. Ed. Christof Wegelin. New York: Norton, 1984. 112-187.
- _____. *Italian Hours*. Ed. John Auchard. New York: Penguin, 1995.
- _____. *The Notebooks of Henry James*. Ed. F. O. Matthiesen and Kenneth B. Murdock. Chicago: U of Chicago P, 1981.
- Miller, J Hillis. "History, Narrative, and Responsibility: Speech Acts in ‘The Aspern Papers.’" *Enacting History in Henry James: Narrative, Power, and Ethics*. Ed. Gert Buelens. Cambridge: Cambridge UP, 1997. 193-210.
- Parkes, Adame. "Henry James’s Italian Hours and the ‘Ruskinian Contagion.’" *Roman Holidays: American Writers and Artists in Nineteenth-Century Italy*. Iowa: U of Iowa P, 2002. 159-174.
- Tambling, Jeremy. "Monomania and the American Past: *The Aspern Papers*." *Critical Issues: Henry James*. Houndmills: Macmillan P, 2000. 77-93.
- アト・ド・フリース 【イメージ・シンボル事典】東京：大修館書店 1984年。

James's Acceptance of Reality:
The Narrator's Ideality and Its Collapse in *The Aspern Papers*

Tomomi Ushirokawa

According to Henry James's *Notebooks*, the germ of *The Aspern Papers* (1888) comes from an anecdote about a Boston art-critic, a Shelley-worshipper's curious adventure. He strives to obtain Shelley's letters which are believed to have been in the hands of his former mistress. His harsh experience is somehow repeated in the desperate effort and failure of the narrator in *The Aspern Papers*.

The narrator idealizes the age in which Jeffery Aspern and his mistress Juliana Bordereau flourished, regarding them as sacred. In this paper, the meaning of the narrator's idealization of the past is examined in relation to James's concern for Venice and his view of journalism.

In his travel narrative, *Italian Hours*, James gives impressions of how Italy is moving into the twentieth century after the success of the Risorgimento. As an acute observer, James expresses his celebration of old Venice and disgust at its transformation. In *The Aspern Papers*, Venice plays the role of a place which emphasizes the narrator's nostalgia and idealization of the romantic past that has long been lost. He has a desire to call back the past and believes it is possible to do so, though his ideal often conflicts with the actual difference between contemporary life and the romantic past.

The narrator suffers shock when he realizes the fact that Juliana is no longer the beautiful lady who was once an object of the poet's love, but an old woman who shamelessly pesters him for his money. For the narrator, the ideal past means the era of the early-nineteenth century in which some brave American artists such as Aspern had visited Europe to study art. He believes that the past can be reproduced if he succeeds in obtaining Aspern's love letters from Juliana's hand. One can say that his belief is just based on obsession and an excess of imagination because he only romanticizes the past by his self-serving idealization.

In describing the fantastic ambition of such a narrator, James also tries to convey a vulgar aspect of journalism. He seems to insist that no journalist has the right to invade the privacy of a famous man of letters. James himself

suffered from disgusting attacks by intrusive journalists who wanted to get scoops about his private life. Even with a strong sense of mission as a journalist, the narrator is described as resembling "the reporter of a newspaper who forces his way into a house of mourning" (154). Furthermore, the narrator is interested in Aspern's scandalous relationships with women, showing the commercially driven, shallow, journalistic aspect of his research.

Living in a technologically advanced age of the late-nineteenth century, the narrator feels nostalgia for what it used to be in the early nineteenth-century. The narrator's lack of morality produces a critical feeling in James who cared about excessive journalistic power, as the modernization advanced in the United States in the 1880s. At that time, James struggled with the poor sales of his works and took out his frustration on the critics, regarding them as stupid. James was also depressed by the experience of losing his parents and the failure of his playwriting in the 1880s.

Around that time, the price of books began to fall rapidly with the technological development of the publishing industry. The concept of mass media came into the world and became established by the end of the nineteenth-century. The world the narrator lives in is not the romantic past but "the age of newspapers and telegrams and photographs and interviewers" (115).

James seems to consider the rapidly changing late nineteenth-century America as a lonely place in which the good old days are gradually forgotten. His disconsolate impression of the social phenomena suggests that the nostalgic past envisaged by the narrator can no longer be restored.

The narrator finally accepts the reality after taking pains to confront it. James may be attempting to say that Aspern is present only in his papers and the narrator's ideal. James also tries to discover how to deal with the reality and accept it through his depiction of the narrator's discouraging experience. The failure of his quest for the papers indicates a minimum degree of moral sense that James requires him to show.

Ube National College of Technology